

『台湾文学コレクション 1 近未来短篇集』

伊格言ほか著、三須祐介* 訳、呉佩珍・白水紀子・山口守編、早川書房、2024 年

島田 龍†

0.

人間はね、自分が水面から顔を出してるときに見えるところにいる人が友だちなんだよ。どんどん泳いでいけば、場所が変わって別の人が友だちになる。(野嶋剛『タイワニーズ：故郷喪失者の物語』小学館、2018 年)

大の食通で「金儲けの神様」と呼ばれた邱永漢（1924-2012）が娘に遺した言葉だ。かの経済評論家がもとは作家だったことを知る人は今やそう多くないだろう。日本統治下の台湾において、台湾人（本島人）の父と日本人（内地人）の母との間に生まれた邱は、最初は若き詩人だった。日本の敗戦後、台湾の独立運動に関わるも挫折し、香港に亡命したのち日本で作家活動を始めた。小説「濁水溪」が1955 年に直木賞候補作となり、翌年「香港」が直木賞を受賞した。外国籍で初の受賞者だった。

「民族を捨て国境をなくすことこそ本当の叛逆でなければならぬのに」と語り手の「私」が語る「濁水溪」は、「香港」とともに国家や民族に翻弄される人々の物語だ。それは邱永漢自身の亡命人生と重なる。国家・民族・血といった虚構からの逃亡を試みる叛逆の文学ともいえる。日本で日本人に向け日本語で書かざるを得なかった邱の筆はやがて行き詰まりをみせる。その後の邱が手にした確かな虚構が、金と食という欲望だった。

私は幼いころ長崎と神戸に暮らしていたこともあって、華僑の文化はなじみ深かった。神戸の家は中華同文学学校の向かいにあり、関帝廟は遊び場で、同級生には華僑の子弟もいた。学校の先輩にもあたる陳舜臣（陳自身は神戸で生まれている）の本は当時からよく読んでいた。

邱永漢と陳舜臣は日本語作家ではあるが、国境・民族・言語のはざまに浮かぶ台湾島から海を漂い渡ってきた漂泊者（ディアスポラ）の文学という意味で、私が台湾の文学を体験した原点となった。

1.

本書を手にした最初の印象は、大いなる期待とともに「SF か……」という少しの戸惑いである。SF を好んで手に取ることはあまりない。ただ、毎年2 月の『SF マガジン』（早川書房）は購入し、年間のジャンルベストやトピックに目を通すようにはしている。

* 立命館大学文学部 教授

† 立命館大学文学部 授業担当講師
shimaryu@fc.ritsumeai.ac.jp

そこでここ5、6年の間によく見聞きするのが「中国・アジアSF」だ。ファンの高齢化が著しい日本のSFとは異なり若さと勢いがある。台湾のSF事情に通じていないため判然としないが、本アンソロジーの著者プロフィールを見る限り、いわゆるSF専門作家がメインとは限らない。あくまでSF的要素を持った小説集と理解した方がよいだろう。実際、早川書房が版元にもかかわらずタイトルにSFと冠していないところに、幅広い読者に手に取って欲しいとの思いが窺われる。なお、邦訳が初めての作家がほとんどで、収録作の多くは2010～20年代に発表されている。以下、収録作を順不同で紹介しよう。

巻頭作は**賀景濱**「**去年アルバーで**」である。仮想空間上の都市を徘徊するバーチャル市民たちのコメディといった趣き。今のVRのようにユーザーの身体が別に実在しているというよりは、最初から仮想の存在として生きているように読める。この世界では死は存在せずデリートがあるのみだ。バーチャルセックスが主な娯楽となっている。

全体を貫く猥雑さに猥雑を重ねた！哲学的な掛け合いを愉しめるかどうか。巻頭に据えるには人を選ぶ尖った作品だろう。退廃的なサイバーパンクの雰囲気が入った。

許順鏗「**逆関数**」は、物語を味わうという人類だけが獲得した体験を、一種の宗教体験として電脳化するガジェットがキーとなる。SF色が濃い作品だ。

林新恵「**ホテル・カリフォルニア**」も全てが数値化されたVRの閉じた空間が舞台である。デジタルな世界だが、実に美しい散文詩のような文章を味わうことができる。お気に入りの一節を引こう。

彼女がふたつの点を線で結ぶのは、まるで私の身体で、星を繋いで星座にするかのようだった。そして私の肉体はついに夜の帳^{とばり}となって私じしんを覆い隠し、日没が訪れるかのように意識は消えていく。(179頁)

評者はピグマリオンイズムに関心を持っている。ピグマリオンイズムは人形愛と訳されることもあるが、人造人間やAI、ラブドールなども含む。広義には人間同士の関係性を視野に入れる。ある人物が創造者として、ある人物を被造者のように自分の理想に育てあげる、支配するといった嗜好・傾向を指す。それは親子・カップル・教師と教え子など様々な関係性に発現する。欲望の客体であったり、人形化願望であったり……。本書にはピグマリオンイズムのモチーフが認められる作品が少なくない。

湖南蟲「**USBメモリの恋人**」は、社長の生態データをアンドロイドにインプットすることで「彼のすべてを自分のものにできだろうと信じていた」女性秘書が主役である。社長のプライベートな性愛データを非合法に入手する同僚男性が協力する。

秘書は自分でも社長の音声ファイル・監視カメラの映像・筆跡がわかる文書のコピー・盗撮写真といった様々な情報を蒐集し、完全なデータにしようと執念を燃やす。彼女のストーキング行為は、社長その人との恋愛の成就を目的としてはいない。カスタムドールとしてのアンドロイドに個々の情報データをダウンロードすることで、彼女にとってのもう一つの「社長」をセクサロイド化する所有の欲望に他ならない。当の社長は全くあずかり知らないのだ。社長を構成する「部分」がアンドロイドのもとに集合したとき、それはどこまでホンモノの「社長」といえるのか。

アンドロイドは秘書の欲望を映す器であるが、実は彼女の身体もデータの集合体として同僚男性の欲望の客体となっている。人間もアンドロイドも等しく純粹客体となる。恋愛とフェティシズムの境界が融解した奇妙な関係性が読みどころである。

なにも他人事ではない。たとえば現在、人の身体や写真をスキャンすることで3D データを作製し、3D プリンターによって本人そっくりのフィギュアを作ることには可能だ（実際にこの技術を使って故人を偲ぶ「遺人形」がある）。いずれ生成AI技術を掛け合わせたラブドールも生まれるだろう。

姜天陸「小雅」もアンドロイドの話である。ある中年男性が一人で暮らす老母のため、介護アンドロイド小雅を手配する。母親が順応できるように、小雅は息子の体臭や声の周波数、性格や思考をカスタマイズしている。しかし、その小雅が失踪してしまう。果たして小雅は「虐待」されたのか、失踪の謎が明らかになるのだが……。

小雅は息子のデータで作られたにもかかわらず、見た目は女性である。介護労働者が女性に偏る台湾の現状を反映し、さらにアンドロイドそのものが外国籍労働者を連想させるとの訳者三須の指摘は首肯できる。日本でも介護福祉労働は、東南アジアなど外国籍労働者が多くを担う。作中、小雅を人間として扱うべきだと諭す息子に対し、「連中に魂はあるのかい」「けだものにも及ばないわ」と反論する母の眼差しは、深刻な意味合いを持つといえる。

介護ロボットとセクサロイドは、近未来の身近なアンドロイドの表と裏だ。もっとも現在の介護ロボットは移動や排泄、入浴や見守り支援に特化した機器であり、小雅のように滑らかなコミュニケーションがとれるヒト型アンドロイドの実現普及はまだ先らしい。

日本のオリエント工業は障害者向けのラブドール開発製造メーカーとして出発し、さらに高齢者に顧客を広げていったといわれる。かつて、障害者とラブドールを扱った木下順一『人形』（影書房、1993年）のような小説もあったが、介護と性機能をあわせ持つ自律型のアンドロイドが人間とどのような関係を結ぶのか、近未来文学の想像力に期待したい。

巻末作の**伊格言「バーチャルアイドル二階堂雅紀詐欺事件」**は日本を舞台としている。伊格言といえば以前、『グラウンド・ゼロ：台湾第四原発事故』（倉本知明訳、白水社、2017年）が話題になった。日本の311の衝撃を受け刊行、台湾の原発廃止という現実の動きを促した小説である。

本作に話を戻すと、18歳の男性バーチャルアイドル二階堂雅紀に多くの女性がのめり込む現象が発生する。家族を顧みず破滅寸前に陥るファンが続出し事件化した。彼女たちに共通するのは夢で二階堂に初めて出合い、現実と混然一体となって対象に依存する構図だ。

なぜ彼女たちがそのような「奇跡」を信じるに至ったか。夢の描写が幻想的で読者の私も思わず陶醉してしまう。同時に、生物学や心理学といった科学的知見をもって依存の構図を冷静に考察しているのがSFらしい読み心地だ。そして「愛の虚しさ」「人間の必然的な孤独」が導かれる。アイドルもピグマリオンズ的な欲望の器である。現代日本を覆う“推し”という癒やしと搾取の構造に対する風刺的批評になっているのが興味深い。

2.

本アンソロジーでは、先の「小雅」のように近未来における親子関係の在り方を考えさせる作品も多い。**蕭熠「2042」**は母と娘の関係を描く。2040年代、人々はなるべく外に出ず仮想空間でコミュニケーションをとるようになっていく。旅を愛し外出を好む主人公の高齢女性は、周囲や現代っ子の娘とは感覚も価値観もすれ違う。

脳にチップを埋め、肉体の全てを更新する時代である。懐古主義者と見なされかねない女性のアイデンティティの揺らぎを問うなかで、捨てたはずの肉体に復讐される人間を淡々と描写している。

社会に違和感を覚えつつ、娘を思う母の複雑な感情が胸を打つ。とくに娘のチップを自分のチップ

と入れ替えることで相手の記憶と同期し、自我が混在する描写が見事だ。母の「血と肉」としての娘、母子関係の因果の物語でもある。

俗に「一卵性母娘^{おやこ}」という言葉がある。両者の人格が未分化の状態、共依存の関係性だ。一見、他人からは仲のよい双子、または友だちに見えるが、そこにはやはり主と従が介在している。母の自己嫌悪が投影されたり、逆に理想の鏡として娘が同一化する危うさがある。本作は家族というピグマリオンズムの呪いに向き合う母の語りとなっている。

黄麗群「雲を運ぶ」は本書の白眉だろう。孔雀と天空という名の母子は、人間の脳にログインし、その感情を運ぶ「代理人」を家業としている。

シャーマンを思わせ、悲しみや恨み、嫉妬といった負の感情を処理し、精神を安定させることを目的としている。代理人の顧客は富裕層のため経済的に問題はないものの、他人の感情を運ぶためか自らの人生の実感に乏しい。感情の「不純物」を澱のように分離し注ぎ込む、まさに人の形をした器となっている。感情を分離できたら人は幸せになれるのか、問いは重い。

また、訳者が本作をクィアSFの系譜に位置づけ、「性についての認識を攪乱する」と指摘するように、孔雀と天空以外の人物の性別が曖昧で、訳も工夫されている。

本書の刊行を記念して、2024年に来日した作者黄麗群によるトークの一節が目をついた（早川書房オンライン「小説は、人が遠くを想像することから生まれるもの」）。

この「近未来」という言葉は、ただのジャンルやテーマではなく、今の台湾の作家たちが、この時代の困難に向き合いながら、意識的にも無意識的にもそれを乗り越えようとしている姿だと思います。

「時代の困難に向き合」うとは、台湾の文学の特色をよく捉えた言葉だと思う。国家という虚構と歴史のトラウマを抱えた台湾では、中国語・台湾語・客家語・先住民の諸語など各言語と複数の民族が併存している。

例えば、映画『非情城市』や『牯嶺街少年殺人事件』、近年日本でも公開されたホラー映画『返校』、冒頭に触れた邱永漢の小説や陳舜臣『怒りの菩薩』（台湾でドラマ化）など、ジャンルを問わずエンタメ作品でも二・二八事件（1947年）や白色テロの時代が重要な背景となっている。

また、本書の続刊となる『台湾コレクション2 風の前の塵』（施叔青著、池上貞子訳）、『台湾コレクション3 二階のいい人』（陳思宏著、白水紀子訳）もSFではないが、民族・貧困・クィア・ジェンダーといった問題が根底にある。

台湾の文学が現代社会を描こうとすれば、大胆な虚構と幻想と風刺性を兼ね備えたSFが力を発揮するのだろう。

本書は大きくいえば訳者があとがきで整理したように、人類と非人類（アンドロイドなど）の関係性や人類の非人類化といった「ポストヒューマン」の視点に貫かれている。

とくに「USBメモリの恋人」「雲を運ぶ」「ホテル・カリフォルニア」「2042」などは、アイデンティティ、同一性の問題を問うている。すなわち、全てが更新されるデータの集合体は、肉体と意識の同一性をどこまで担保できるのか。英雄テセウスの船の朽ちた部分の交換が全てに及んだとき、それはもとの船といえるのか、「テセウスのパラドックス」である。

これはSF小説の祖とされるメアリー・シェリー『フランケンシュタイン』（原著1818年）にも通

底するテーマだ。死体の様々な部位から作られた人造人間が言語と智識を獲得し「ヒト」に近づくが、創造者たるフランケンシュタイン青年と社会から疎外されることで「怪物」となっていく。科学の発展が新たな困難を生み出していくことを物語は予言してきた。

本書の特色がもう一つある。従来の性役割や異性愛信仰を解体するクィア（クィア）の精神が色濃い。徐嘉澤『次の夜明けに』（原著 2012 年、書肆侃侃房、2020 年）、陳思宏『亡霊の地』（原著 2019 年、早川書房、2023 年）などの「同志文学」（LGBTQ+ など性的マイノリティを主題とした小説）を訳してきた訳者の確かな目が利いている。ロマンティック・ラブ・イデオロギーに回収されない性のかたちを表現するには、現実を異化する SF の文法が適していると評者は気付くことができた。

白先勇『孽子』^{げっし}（原著 1983 年、陳正醒訳、国書刊行会）という小説がある。1970 年代、台北の新公園（現在の二二八和平公園）の同性愛者コミュニティに集う人々を描いている。プロローグに続き冒頭部は次のように始まる。

我々の王国には闇夜があるだけで、白昼はない。夜が明けるや、我々の王国はたちまち姿を隠す。極めて非合法的な国だからである。（略）だが、極めて密やかで極めて非合法的なこの狭隘な小国では、ここ何年かの間に、涙なしには語るができず部外者には聞かせることのできない、転変の痛史を少なからず経験してきた。（13-14 頁）

王国とは、家族や故郷から異端視された人々が彷徨い^{さまよ}流れ着いた居場所の比喩だ。と同時に訳者の陳が指摘するように、よるべなき台湾の寓意でもある。私はこれを読んだとき、フランスの作家ラシルドのデカダンス小説『ヴィーナス氏』（原著 1884 年、高橋たか子・鈴木晶訳、人文書院）を思い出した。

貴族の女性ラウルが美しくも貧しい青年ジャックと出会い、おたがいの性を逆転させた愛の関係を築こうとする。作者のラシルドがそうだったようにトランスジェンダーの物語であると同時に、ジャックが蠟人形となってようやく異端の愛が成就するピグマリオンイズムの文学でもある。作中、ラウルは言う。

わたしたちは、あなたのまったく知らない不思議な国の住人になるのよ。そこは狂者の国、でも獣の国ではない……。 （略） その国では、誰もが夢みている。存在するにはそれで十分なの。あなたも夢をみる。（58 頁）

悪魔の娘、魔女だと罵られるラウルたちの理想の国は、道徳的・宗教的には「狂者の国」と見なされるかもしれない。しかし、容赦ない世界に対し「反逆する女性たちの一人」だと自認し、「新しい頽廃」を生み出す「新しい火」に仕える司祭となることを決意する。ここにも叛逆の精神がある。私は台湾の文学に、これと相通ずるクリティカルな魅力を感じる。

以上、書評の責を果たし得たかといえ、自らの不明を詫びるしかない。本書は個々の小説の面白さというに及ばず、アンソロジーとして一冊の本に編まれたこと自体に大きな意味があると断言できる。きっと刺激的な読書体験となるはずだ。